

日本近現代文学におけるタイ表象の研究

タナポーン, トリラッサクルチャイ

<https://doi.org/10.15017/1440992>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : トリラッサクルチャイ タナポーン

論文題名 : 日本近現代文学におけるタイ表象の研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

タイは日本に軍事的に侵攻された過去があり、戦後においても日本企業が侵出し経済的に支配された一面がある。しかし、日タイ関係の研究は、日中関係や日韓関係の研究に比して、タイ日双方ともに蓄積が十分ではない。ただ、タイ側から見れば、日本の影響力は、おそらく一般に日本人が想像する以上に大きい。その日本が、近代においてタイをどのように把握し、表現してきたのか、その表象のあり方を新聞・紀行・旅行記および文芸作品を中心的な素材として考察することが本論の具体的な内容となる。本論は2部6章の構成である。第1部「メディアの中のタイ」(第1-2章)では、タイについての新聞や旅行記などの資料を中心に検討する。第2部「日本文学におけるタイ」(第3-6章)では、小説におけるタイの特色について検討する。第1部第2部ともに検討の範囲は、明治期から1990年代までである。

第1章では、1874年創刊の「読売新聞」におけるタイ関係の記事を検討する。明治大正期のタイ表象は南進論や移民政策に関係し、その文脈において豊饒な資源がある「日本の南進先」であるシヤムとして語られる点に特色がある。戦前昭和期は、日本の重要な貿易相手国で「大東亜共栄圏」を前提にした「友邦」や「日本の弟」として表現される点に特色がある。戦後昭和・平成期はタイ情報の多様な移入に伴い、多様なイメージが投影する。それらの分析を通じ、日本におけるタイ表象が、各時期の日本の政治的経済的戦略と不可分に結びついている表象の枠組について考察した。

第2章では、タイに関する紀行・旅行記に注目し、日本人の渡航目的や現地における眼差しのあり方について検討する。明治大正期の旅行記は国益に資する報告書的性格や資源の存在を伝えるものも少なくない。昭和10年代の特色は日本企業の貿易奨励のため、近代化の要素やエキゾチックな要素が強調される。1964年以降の旅行記では、買春、麻薬のイメージが頻繁に取上げられる。1987年以降、急増する観光客によって多種多様な旅行スタイルが生まれ、多様なタイのイメージが様々なジャンルの旅行記に反映することになる。紀行・旅行記におけるタイ表象の変容が、文芸作品にどのように投影するのか、その前提として位置づけられる内容になっている。

第3章は、近代の山田長政テキストにおける「シヤム」イメージの変遷を検討する。明治期の山田長政テキストを代表する遅塚麗水『少年読本第七編山田長政』(1899年)は明治期南進論を奨励する意味合いがあり、「シヤム」はその理想的空間となっている。角田喜久雄『山田長政』(1940年)は、長政とルタナ姫のロマンスを通して、当時の大東亜共栄圏のイデオロギーを優位の日本(長政/男)と劣位のシヤム(姫=女/タイ)というパターンを通じて表象し、親日的なイメージを強調している。遠藤周作『王国への道 山田長政』(1979年)においては、日本(長政/男)とアユタヤ=シヤム(姫/女)のパターン化は従来通りであるが、アユタヤ=シヤムは「怖ろしい」女性としても描写され、戦前までの理想的な長政像や政治的言説との呼応が稀薄になる。近代以降に繰り返し文芸化される山田長政テキストの変容を作家や時代との相関から分析している。

第4章は、戦時中の南方徴用作家が書いた作品におけるタイの描写を検討する。南方徴用作家の作品に共通するのは、戦中にありながら癒しをもたらす平和な空間としてのタイである。また、その関係が、日本（男）とタイ（女）というロマンスとして反復されることである。南方徴用作家が用いた構造は、戦後におけるタイの人気小説『メナムの残照』（1967年）でも見られるが、親日と反日感情の混在が投影しており、その点に日本におけるタイ表象を内面化しつつ変容するタイの複雑な自画像が窺われることを指摘する。

第5章は、1970-1980年代のミステリーのジャンルでのタイを考察する。ミステリーにおけるタイの特色は、また、日本（男）とタイ（女）というパターン化されたロマンスを頻用しながら、社会問題や貧困の中で苦勞して働く女性がしばしば登場する点にある。その特色を通じて、日本人男性は可愛そうなタイ人女性を援助する存在として主体化されるというパターンが見られる。この現象は同時代の日本人による売春行為を美化してしまう言説構造を持つことを指摘している。

第6章は、1990年代の小説として村上春樹「タイランド」（1999年）を検討する。「タイランド」は国際的な都市性、リゾート化された癒し空間、未開地的な要素などが同居する場所としてタイの奥行きを描き、登場人物の「ニミット」という名に、タイ語の複数の意味が仮託されていることを指摘する。しかし、一般の日本人読者には、ニミットの名が持つ複数性や象徴性や多様性は読まれない。日本人にとってのタイの画一的なイメージとタイの側から見た場合の奥行きとの非対称性を黙示的に示したテキストが「タイランド」であることを論じている。

終章は、日本近現代文学におけるタイ表象の変容が、〈シャム〉〈タイ〉〈タイランド〉の三つの語に呼応することを確認している。〈シャム〉は、基本的に、江戸期以来の山田長政テキストに見られる遠い南国という漠然としたイメージを負いつつ南進論の対象として政治的言説を背景に生成する場合が多い。20世紀の近代国家として戦時中（1939年）に国名を改名した〈タイ〉は、戦時下においては兄妹関係として語られ、戦後においては1970-1980年代のミステリージャンルに見られるかたちでイメージが形成されていく。そのイメージの画一化を脱する志向性を持つのが、〈タイランド〉であろう。本論で具体的に分析することはなかったが、1990年代以降の日本の現代文学におけるタイ表象は、〈タイランド〉が持つ複数性や多様性に呼応するものとして表現されていると観察し、今後の検討の布石としている。